青森県立郷土館研究紀要　第46号，21 － 24，2022．3

青森製氷株式会社の製氷工場に使われている石材（追補2）

島口　天[1)]

Building Stones Used at the Ice Plant of Aomori Seihyo Co., Ltd（Supplement 2）

SHIMAGUCHI Takashi

キーワード：青森製氷，九艘泊石，脇野沢安山岩類，津軽半島

はじめに

青森市にある青森製氷株式会社の製氷工場は，下北半島のむつ市脇野沢九艘泊で採石された脇野沢安山岩類の火砕石（石材名は九艘泊石）を利用した石造りの建物で，大正 9（1920）年に建設された．青森と九艘泊は海路を通じて早い時期から交流があり，漁業においては青森製氷の役員の中に九艘泊の漁業者と密接な関係がある者がいたため，九艘泊石を製氷工場に利用することにつながったと考えられる．九艘泊では九艘泊石をヤキ石と呼んでいたようで，井戸枠や家の土台，カマドなどに利用されているほか，市杵島神社の灯篭や手水舎にも利用されている．また，九艘泊 - 川内間の脇野沢八幡宮や小沢八幡宮，蛎崎八幡宮，川内八幡宮でも石灯篭や土台の一部，石段，土留に利用されている（島口，2019；2020）．

九艘泊石は，上記以外では青森市内の個人宅の塀，板柳町で石蔵（現薬局）や土留に利用されていることが確認できている（島口，2019）のみだったが，2020 年以降の調査で津軽半島の陸奥湾側でも利用されていることがわかってきた．今回は，津軽半島の陸奥湾側での九艘泊石利用について調査した結果を報告する．

1　調査概要と結果

九艘泊石は，淡緑黄灰～緑灰色の粗粒火山灰を基質とし，暗灰～黒褐色の安山岩の角礫を含むが岩相変化が著しく，安山岩礫の大きさや含まれる割合等が大きく変化する．よって，調査において九艘泊石かどうかの判定は，青森製氷株式会社の製氷工場に使われている様々な岩相の九艘泊石の写真と比較して行った．

九艘泊及び津軽半島における今回の調査地区，これまで行った下北半島の調査地区を図 1 に示す．

（1）青森市油川大浜「熊野宮」

2020 年 4 月 24 日に調査を行い，次の 3 か所で九艘泊石の利用を確認した．

①石灯籠

風化が著しく，火袋と竿の表面には保護のためかコンクリートが塗られており，宝珠と笠，中台，基礎下の土台で岩相が確認できた．寄進者及び年月日等は読み取れず不明である．

②拝殿および幣殿

建物の土台はコンクリート製で，それを取り囲む 1 段低い土台の側面に利用されていた．なお，さらに 1 段低い土台側面には別の石材が利用されていた．

③恩師澤田俊作先生碑

碑を囲む 2 段の石積み土留の一部に利用されていた．明治 41（1908）年 10 月 7 日建立．

熊野宮は，明治 11 年に本社新築，同 23 年に拝殿新築，大正 11（1922）年に社殿の大修繕を行っている（西田，1989）．

（2）蓬田村広瀬坂元地区

2020 年 5 月 4 日に調査を行い，国道 280 号沿いで，個人宅前の生垣土留に九艘泊石の利用を確認した．生垣は玄関前に左右に作られており，土留石は道路側で 15 個× 2 段に組まれていた．同年 8 月 18 日に近くの広瀬

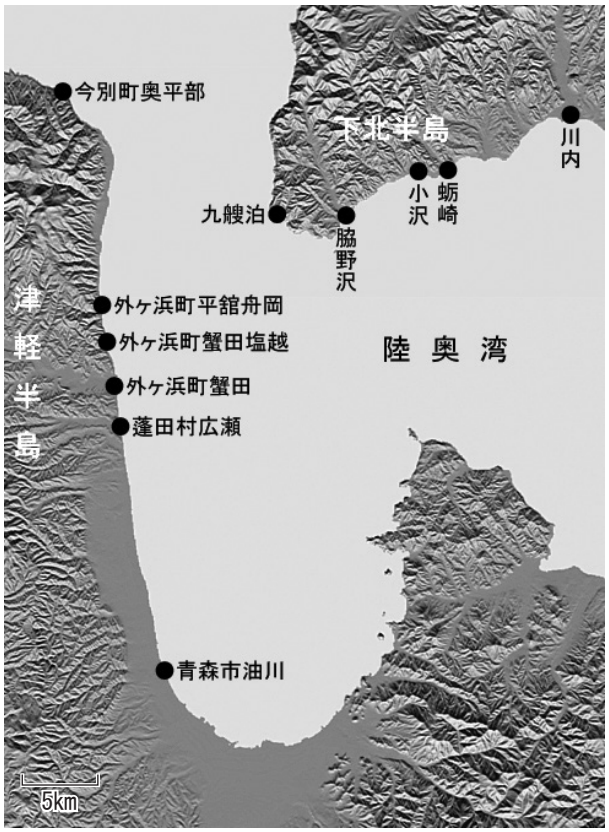

図１　むつ市脇野沢九艘泊と調査地区の位置
（地図ソフト「カシミール３Ｄ」を使用して作成）

1）青森県立郷土館　学芸課長（〒 030 - 0802 青森市本町二丁目 8 - 14）

簡易郵便局に電話で聞いたところによると，家主は他県に住んでいるため家は無人で，詳細の確認はできていない．

国道を挟んでこの家の斜め向かいに，塀と蔵だけが残る広い敷地があり，蔵の入口前石段と腰壁に九艘泊石が利用されていた．腰壁の九艘泊石の表面は平らに整えられ，その上の壁はレンガ造りに板張りとなっていた．上記同様に広瀬簡易郵便局に聞いたところ，敷地は北海道で大漁業家として成功した人物の敷地ということだった．肴倉編（1973）によるとこの人物は，北海道に漁場を有した本県有数の漁業家である田中吉兵衛で，建築にも一見識を有していたとある．また，村内の庭園のひとつである田中吉兵衛庭園は大正 8（1919）年造営とあり，この敷地内にあったと思われる．2020 年 8 月 19 日に同村教育委員会に電話で聞いたところによると，敷地は田中氏のものであるが連絡先は不明ということで，詳細の確認はできていない．

（3）外ヶ浜町蟹田地区

2021 年 9 月 8 日に個人宅の土留に九艘泊石の利用を確認し（図 2），家主から次の証言を得た．

・石は大正 12（1923）年に建てた家の土台に利用していたもので，家を改築したため土留に使用している．
・この石は，この地区一帯で同じように利用されていた．
・この石かどうかわからないが，この地区で使う石材は下北から船で運んできた．青森市の野内にも石材はあるが，遠いため下北のものを利用した．

2021 年 10 月 7 日に蟹田八幡宮の調査を行い，一の鳥居の内側石段の右側に建っている小屋の，土留の石積みの一部に利用されていることを確認した．狛犬も火砕岩でできていたが，軽石が多く含まれることから九艘泊石ではないと判断した．

蟹田八幡宮の建立年月は不詳で，明治 18（1885）年 8 月に本殿及び幣殿，拝殿を新築，明治 42 年 7 月に幣殿を増築している（蟹田町史編纂委員会，1991）．

図２　外ヶ浜町蟹田の個人宅で土留に再利用されている九艘泊石

（4）外ヶ浜町塩越地区

2021 年 10 月 18 日に調査を行い，塩越会館と数件の個人宅で九艘泊石の利用を確認した．

塩越会館では，敷地に沿った海側の道路が北方へ下り，敷地との高低差が北側で大きくなっている．その高低差の敷地土留が石積みとなっており，石積みに利用されている石のうちおよそ北側半分は玄武岩，南側半分が九艘泊石で，一部混在する（図 3）．個人宅では，敷地の土留に九艘泊石が使われていた．

この調査の際，塩越地区の改修前の船着場（ヤライという）を造る石材に関して元区長から次の情報を得た．

・ヤライを造る石材を下北半島の武士泊から船で運んでもらった．石は青石という．
・ふたつや（磯山の北側の家のない所）に石屋があり，黒い間知石を採っていた．

現存するヤライ跡に案内してもらったところ，青石と呼ばれる淡灰色の亜円礫と九艘泊石が土留のように積まれていた．元区長から九艘泊石に関する情報は得られなかった．

小山（1922）の石英粗面岩の項目に「武士泊という所で採石する白色均一の岩石で，石英粒が著しいもの．普通砥石として使用される．」とあり，流紋岩と考えられた．ヤライ跡の青石は，この岩石に該当または武士泊南方の青石という場所から採ってきた岩石であることが考えられる．

黒い間知石の方は，上村ほか（1959）に「蟹田町磯山付近において小泊層を貫く粗粒玄武岩を，海岸付近の露頭において割石として採取している．これはおもにこの付近の海岸に沿って設けられている船着場の建設および修築工事用に用いられている．なお砕石は道路の補修に利用されている．」とあり，採石場所が一致することや色からこの粗粒玄武岩と考えられる．塩越会館の石積みの玄武岩は，これに該当すると考えられる．

外ヶ浜町教育委員会によると，塩越会館は旧塩越小学校で，同校は大正 10（1921）年 4 月 1 日に現在の場所に増改築移転したということである．

（5）外ヶ浜町平舘舟岡「久須志神社」

2020 年 3 月 29 日に調査を行い，次の 4 か所で九艘泊石の利用を確認した．

①石段前の土留
　石段に向かって左側，道路に面したコンクリート製土留内に，九艘泊石が 3 個利用されていた．

②石段の土留（図４）
　一の鳥居と二の鳥居の間の石段の土留に，石積みで利用されていた．

③石段の最上部 3 段と袖石に利用されていた．

④神社道路寄附者の碑の土台
　3 段積みの土台に利用されており，表面にコンクリートが塗られ，2 段目と 3 段目の一部でそれが剥がれて石肌が露出していた．碑は昭和 36（1961）年設置．

表１　下北半島の神社における九艘泊石利用（西から順に配列）

神社名（所在地）	九艘泊石利用場所	年代に係る情報等
市杵島神社（むつ市脇野沢九艘泊）	石灯籠，手水舎，石積み土留	社殿は大正 8（1919）年再建，現在の社殿は昭和 10（1921）年造営.
脇野沢八幡宮（むつ市脇野沢）	日和山チョコマン稲荷神社の石灯籠	明治初めに八幡宮境内に遷座，昭和 17 年に現在の場所に遷座
小沢八幡宮（むつ市脇野沢小沢）	土台，石段・袖石	社殿は明治 7（1874）年建設
蛎崎八幡宮（むつ市川内町蛎崎）	石灯籠，境内の土留	社殿は大正 6 年新築
川内八幡宮（むつ市川内町）	社殿の土台の一部	現在の社殿は明治 32 年建設

表２　津軽半島の神社における九艘泊石利用（北から順に配列）

神社名（所在地）	九艘泊石利用場所	年代に係る情報等
稲荷神社（今別町奥平部奥村元）	鳥居の土台，石段の袖石（一部）	修理第一回不明，第二回は昭和 11（1936）年，第三回は昭和 22 年
久須志神社（外ヶ浜町平舘舟岡）	石段前の土留，石段の石積み土留，石段の最上部 3 段と袖石，碑の土台	大正 4（1915）年 1 月 25 日本殿, 幣殿, 拝殿落成届出
八幡宮（外ヶ浜町蟹田）	小屋の石積み土留（一部）	明治 18（1885）年 8 月本殿及び幣殿, 拝殿新築，明治 42 年 7 月幣殿増築
熊野宮（青森市油川大浜）	石灯籠, 拝殿および幣殿の土台（一部）, 碑を囲む石積み土留（一部）	明治 11 年本社新築, 同 23 年拝殿新築, 大正 11 年社殿大修繕

図３　外ヶ浜町塩越会館敷地の石積み土留
（左側が玄武岩，右側が九艘泊石）

図４　外ヶ浜町平舘舟岡の久須志神社階段の
石積み土留に利用されている九艘泊石

図５　今別町奥平部奥村元の稲荷神社鳥居の土台（左）と石段袖石から取り外されて置かれている九艘泊石（右）

このほかに，舟岡地区内の数軒の家で，敷地の土留に九艘泊石が使われており，石積みになっている所もあった．

久須志神社は，本殿，幣殿，拝殿の改築が明治 43 年 9 月 22 日に許可，大正 4 年 1 月 25 日落成届出（肴倉編，1974）．

（6）今別町奥平部奥村元「稲荷神社」

2020 年 5 月 4 日に調査を行った．鳥居の土台が九艘泊石の石積みであった（図 5 左）．また，鳥居に向かって右の方に九艘泊石の直方体ブロックが置かれていた．ブロックは 10 個以上あり，高さが約 25cm と共通している以外は，幅や奥行きが異なっていた．地元の自治会長に聞いたところ，3 ～ 4 年前に石段を改修して手すりを付けた際に取り外したものだということで，元々は石段の袖石を構成していたと思われる（図 5 右）．

同神社は，創立が 200 ～ 300 年以前，それ以外は修理について第一回不明，第二回は昭和 11 年，第三回は昭和 22 年，山崩れのために社殿が前方に六尺も押し出されて修復されたという記録がある（肴倉編，1967）．

考　察

今回の調査では，青森市油川から今別町奥平部までの津軽半島陸奥湾沿いで九艘泊石の利用を確認した．下北半島では神社における利用を確認していたことから，同じように神社での利用を想定して調査を進めたが，神社だけでなく個人宅や公共施設での幅広い利用状況が確認された．

下北半島の神社では，表 1 に示したように石灯籠や手水舎，土留等での利用が確認されたものの，その年代を知る直接の手掛かりは得られていない．石段や土留であれば社殿等の建設時に造られ，石灯籠や手水舎であれば同時期に寄進されたと推定すると，社殿等の建設年である明治～昭和初期が利用された年代になると考えられる．

津軽半島の神社では，表 2 に示したように石段や土留，土台での利用が多くみられ，石灯籠への利用は熊野宮のみだった．それぞれ建設や寄進年月日は不明であるため，下北半島と同様に神社の建物の建設年を参考にすると，やはり明治～昭和初期であることが考えられる．なお，舟岡の久須志神社で最上部 3 段にのみ九艘泊石が利用されていることや，奥村元の稲荷神社の石段の袖石に利用されていたことのように，元々は石段が九艘泊石でできていた可能性もある．久須志神社の神社道路寄附者の碑の土台は昭和 36（1961）年設置とあることから，石段を改修した際に取り外した九艘泊石を再利用したことが考えられる．

神社以外での利用年代については，外ヶ浜町蟹田地区で大正 12（1923）年に建てた個人宅の土台に使用したという証言が得られた．この年代は，青森製氷株式会社の製氷工場の建設年である大正 9 年に近く，蟹田地区の他の家にも使われていたという証言から，大正期には青森市のほかに蟹田地区でも九艘泊石が普通に使われていたことが推定される．ほかに大正期の使用が推定されるものとしては，外ヶ浜町塩越地区の塩越会館敷地の土留が大正 10 年に，蓬田村広瀬坂元地区の田中吉兵衛敷地内の石蔵が大正 8 年に造られた可能性がある．

今回，青森県立郷土館（1979）に九艘泊の財産として「昭和 25 年頃まで井戸枠・七輪・建築用等に売れた『ケンチ石』」が記されていることを確認した．脇野沢村史調査団編（1983）に記載のあるヤキ石（井戸枠・土台に利用）という同じ用途であることからこれと同じもので，九艘泊石は昭和 25 年頃まで売られていたことが考えられる．

これまでの調査結果から，九艘泊石の利用状況が明らかになっても，それに関する文献内の情報や神社・住民からの情報は少なく，裏付けを得ることが難しい状況にあると強く感じた．調査を続けることで，利用状況の確認範囲は広がる可能性があるが，その裏付けを得ることはさらに難しくなると思われる．

謝　辞

本報告をまとめるにあたり，蓬田村教育委員会，外ヶ浜町教育委員会，外ヶ浜町蟹田の記田慶市氏，同町塩越地区元区長の角田健美氏，同町平舘舟岡地区自治会長の金沢義彦氏，今別町奥平部村元地区自治会長の長島三千次氏，広瀬簡易郵便局には，それぞれの地区の情報収集の際にご協力いただいた．記して厚くお礼申し上げる．

引用文献

青森県立郷土館（1979）九艘泊・蛸田の民俗．青森県立郷土館調査報告書第 4 集・民俗－ 3「九艘泊・蛸田の民俗」調査報告書，pp.160.

蟹田町史編纂委員会（1991）蟹田町史，蟹田町，pp.1623.

西田源蔵（1989）復刻版 油川町誌．油川町・青森市合併五十周年記念事業協賛会 町誌復刻委員会，

小山一郎（1922）日本産土木建築石材．日本礦業新聞社，pp.215.

肴倉彌八編（1967）今別町史．今別町，pp.709.

肴倉彌八編（1973）蓬田村史．蓬田村，pp.856.

肴倉彌八編（1974）平舘村史．平舘村，pp.948.

島口 天（2019）青森製氷株式会社の製氷工場に使われている石材．青森県立郷土館研究紀要，43，p.29-36.

島口 天（2020）青森製氷株式会社の製氷工場に使われている石材（追補）．青森県立郷土館研究紀要，44，p.1-2.

上村不二雄・対馬坤六・斎藤正次（1959）５万分の１地質図幅「蟹田」. 工業技術院地質調査所 , pp.30.

脇野沢村史調査団編（1983）脇野沢村史 民俗編．脇野沢村役場，pp.737.